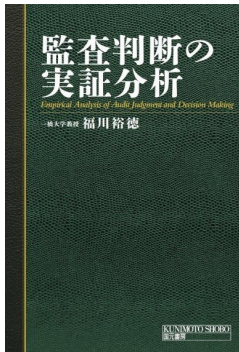


【書評】



『監査判断の実証分析』

福川 裕徳 著

株式会社国元書房

平成24年10月25日刊

A5判・定価 本体3,800円 + 税

我が国の監査リスク・アプローチが、監査実務においてどのように適用され、運用されるかについて、財務諸表監査の質をより高めようとする観点からは、「監査人によるリスク評価が適切に行われているか」という側面と「リスク評価への適切な対応がとられているか」という側面の実態を解明する必要がある。この点に高い問題意識を持ち、監査リスク・アプローチにおける監査リスクに焦点を当て、監査人のリスク評価判断と監査人のそれへの対応における意思決定を実証的に分析したものが本書である。

我が国においては、監査人の判断・意思決定を対象とした実証的監査研究が皆無であったことから、まず、「分析に用いるデータの性質」と「焦点を当てる判断・意思決定のレベル」との2つの視点から、実証的監査判断研究を4つの類型へカテゴライズし、その上で基礎的な考察を行っている。そして、3つの研究テーマを異なる類型から選定し、これらに対して異なる分析手法を適用させ研究を進めている。これら3つの実証研究の相違は、見事なまでに浮き彫りにされて記述されており、構成上の工夫も本書の大きな特徴となっている。

本書の内容を簡単に紹介すると、まず、「第 部 アーカイバル・データ（非公開データ）を用いた研究」では、非公開のアーカイバル・データ、具体的には、監査法人の協力を得て入手した監査調書からのデータを用いて、監査人によるリスク評価と監査計画の関係について分析している。監査計画がリスク評価に基づいて策定されていることは、監査リスク・アプローチが有効に機能する要件であるため、両者の関係を分析しているものである。

次に、「第 部 実験データを用いた研究」では、監査リスク・アプローチが有効に機能するもう1つの要件である監査人のリスク評価自体の適切性の問題を取り扱っている。実験データを用いて、監査人によるリスク評価に影響を及ぼす可能性のある要因として、リスク評価方法と監査要点設定のあり方という2つの要因を取り上げて、その影響を検討している。

最後に、「第 部 アーカイバル・データ（公開データ）を用いた研究」では、一般に公開されているアーカイバル・データを用いて、監査法人レベルでの価格及びコストに関する意思決定を検討している。具体的には、監査クライアントのリスクを中心とし

て、監査報酬に関する先行研究で取り上げられてきた様々な要因が、監査報酬に対してのみならず、監査コストに対してどのような影響を与えているのかを分析している。

本書においては、監査実務の実態解明とその改善に資することを目的として、監査人の判断・意思決定が、どのような要因によって影響を受け、どのようにすれば改善され得るのかについて、多数の分析成果が示されている。これらの分析成果は、監査人、監査法人、日本公認会計士協会、基準設定主体に対して有益なインプリケーションをもたらす内容であり、多大な貢献があり得るものと認められた。さらに実証的監査研究に対して、その研究の方向性を示し、先駆的な役割を果たしている。研究を進めていく上で、監査実務側から実証研究者へのフィードバックが不可欠であり、両者が互いに協力することによって、我が国の実証的監査判断研究が更に進展し、もって監査実務の向上に貢献することを指摘している点も高く評価された。

以上のことから、協会学術賞に値するものとして選定した。